

十年……

久保田万太郎

青空文庫

——まど子さん、何年になつたの、今度？……

と、ぼくは、たま／＼逢つたKさんの、上のはうのお嬢さんに、何んの気なしに訊いた。

——来年、卒業です。

と、まどさんは、ニツコリ、口もとをほころばした。

——えッ、来年、卒業？……

ぼくは、おもはず大きな声をだして、

——ほんと、まど子さん？……

と、改めて、まどさんの顔をみた。

——えゝ。

まど子さんは、もう一度、ニツコリした。

——へえ、それア……

ぼくは、おもはず今度は、溜息を……自分だけにわかる溜息をついた。……のは、嘗て、まど子さんの慶応義塾の大学の入学試験をうけるときの心配と、そして、首尾よく合格したときの喜びの幾分とを、まど子さん、及び、まど子さんのお母アさんと、もにわけ合つたぼくだからである。……お父さんのKさんは、ちやうど、そのとき、フランスへ行つてゐた。……そして、それが、そのまど子さんの返事を聞くまで、ついまだ、昨日きのふの出来事のやうにしか、ぼくには思へなかつたのである……

——驚いたなア、それア……

いつ、そんな……いゝえ、いつの間に、そんな、三年も五年も
の年月がすぎたのだらう？……その間あひだで、一たい、ぼくは、何を
したといふのだらう？……すくなくとも、一人のお嬢さんが大学
に入り、やがてもう、来年は卒業するといふその間で……
ぼくは、いまさらのやうに、ぼくをめぐつて去つた年月のかけ
を追ひ、身のまはりをみまはした。



東京にでゝゐて、七八日ぶりで鎌倉に帰ると、下河原しもがはらの雅楽
多堂といふ、文字どほりのガラクタばかり並べた古道具屋が、い

つの間^まにか、八百屋になつてゐた。

——はて？

と、ぼくは、わが目を疑つた。……しかし、みれば、その八百屋の店で働いてゐるのは、いつもの、よれくの古洋服を無精ツたらしく着た、もとの、矢つ張、雅楽多堂の老主人だつた。

すれば、雅楽多堂が転業したので、代^{だい}の替つたのでないことはあきらかだ。

しかし、古道具屋と八百屋……

判^{はん}じものだ、どうしたつて、これ。……

下河原には、もう一けん、同じやうな店がある。雅楽多堂よりはあたらしくできた……といふことは、ぼくが鎌倉に住むやうに

なつてからできた店だが、雅樂多堂とはちがつて、このはうは上^じ物屋^{やうものや}だつた。一二度、買物をしたのが縁で、顔なじみになり、ときには、必要がなくつても、ぼくは、その店のまへに立つた。……すなはち、ぼくは、そこに寄つて、道具屋、化して、八百屋になつたわけを聞いてみた。

——家^{うち}の方^{かた}たちが、いやになつたんださうです、道具屋が……と、年のわかいその店の主人のこたへは、しごく簡単だつた。

——しかし、いやになつたからつて、右からひだり、道具屋なんてものが、すぐに?……

——止^やめられるか、と被仰るんですか?……

——と思ふけれど、われ／＼にすると。……手もちのものを処

分するだけだつて、君……

——そんなことは、あなた。……トラツクに積んで、市場いちばにさへもつて行けば、何んにも苦勞は入りません。……市場で、適当に、処理してくれます。

——なるほど、さういふ手があれば……

——ですから、逆に、はじめようと思つたら、金とトラツクをもつて市場にさへ行けば、明日あしたからでもすぐ開業できます。……道具屋なんてものは、ですから、思ひやうによつちやア、こんなわけのない稼しやうばい業はないんで……

——八百屋はどうだらう？

——八百屋ですか？……このはうは知りませんが、これだつて、

なか
中へ入つてみたら、存外、わけなくできるんぢやアないでせうか？……何分、値段のきまつてるものを売るんですから。……そこへ行くと、道具屋のはうは……

ぼくは、主人のすゝめてくれた、店頭みせさきの、売りものゝ大きな椅子に腰を下ろし、さうした話をしつゝ、みるともなしに往来のはうをみた。曇つて、底冷えのする二月の末の、たまゝ人通りの絶えた、白く、しんとした道のまん中に、素足にサンダルを穿いた、パンくゝとしか思へない洋服の女が二人、何かヒソヒソ、話をして立つてゐた。

——鎌倉ツてところ、こんなにも寂しいところだつたのか？
ヒョイと、ぼくは、さう思つた。……途端に、血の退ひくやうに、

すべての希望の身うちから消えるのを感じた。



——今日、東京のお宿をおたづねしましたら、こちらだといふ
ことで……

と、たまく、東京から来た客はいつた。

——えゝ、昨日、きのふ帰りました。

と、ぼくはこたへた。

——今度は、当分、こちらで？……

——いゝえ、あした明日、また、出ます。

——それは、また。……それぢやア、セツかく、お帰りになつても……

——さうなので。……何んのために帰つて来るのか、自分でも分りません。……しかし、夜、十一時十五分の終電車に乗つて帰り、あくる朝、すぐ、また、九時まへの電車に乗つて、十時までに新橋に下りたりする諸君のことを思つたら、ぜいたくはいへません。……寝に帰るばかりのわが家^やけふの月、にしちやア、鎌倉ツてところは、何んとしても東京から遠すぎます。

——しかし、どのみち、馴れておしまひになれば……

——ところが、馴れません。……不思議な位、馴れません。……といふことは、いつになつても、何年たつても、鎌倉、東京間

の距離はちツとも短縮されません。……短縮されるどころか、年とゝもに、その逆になつて来るやうな気さへするので……

——それは、なぜで？……

——それだけ、こツちの健康も衰へて来たんでせうね、とる年で……

——何年におなりになります、こちらへおうつりになつて？……

——ちやうど、十年になります。

——十年？……

——一トむかしです。……終戦の年の十一月ですから、こツちへ来たの……

——なるほど、それだと……

——東京から帰つて、停車場に下りても自動車はおろか、リntaxさへなかつたんです、その時分。……いやでも、この材木座まで、あるくより外に方法がなかつたんです。……仕方がない、あるきました、真つ暗な道を、二十分かけて……勿論、十時……といひたいが、じつは、九時すぎたら、人通りはなくなり、起きてゐる家なんぞ、一けんもありません。……何も、これはしかし、鎌倉にかぎつたことではなく、そのころは、銀座でもさうでした……

——わたくしも、一度、新橋演舞場のところの橋の上で、三人づれのアメリカの酔ッぱらひに追ッかけられ、シエーム、オン、

ユウ”と怒鳴りながら、逃げました、逃げました……

——鎌倉にはクロンボのわるい奴が出没しましてね。……だから、ぼくは、万一にそなへて、右のかくしに、ナイフに附いてゐるキリを握りづめでした。……そして、大きな声でウタを……うたふんぢやなくて、呶鳴りつゞけてあるいた。……いまは八幡まへにゐる漫画のSさんが、まだ、材木座にゐた時分で、帰る方角が同じだつたんで、しばく一しよに合唱しながらあるいたことをおぼえてゐます。

——何を合唱なすつたので？……

——“青葉しげれる”です。……知ってますか、あの歌？……知っております。……“青葉しげれる桜井の、里のわたり

の夕まぐれ……木の下蔭に駒とめて、世の行末を、つく／＼と……、子供の時分、上の兄のうたふのを聞いておぼえました。

——ぼくは、好きでしてね、むかし、あの歌が。……ぼくの小学校の二三年時分に流行^{はや}つたんですが、ぼくは、いまでも、あの歌をしまひまで知つてゐる。……”ともに、み送り、み返りて、わかれを惜しむをりからに、またもふりくるさみだれの、なかに一トこゑ、ほとゝぎす……”といふんですが……

——兄は、そこまではうたひませんでした。

——いゝえ、だれも知りません、こゝまでは。……しかし、一寸さきもわからない真つ暗な道を、この歌をうたつてあるいてゐると、しまひには胸が一ぱいになつて、だん／＼声が小さくなつ

た。……いまにして思へば、それこそ“世の行末”だつたんですね。……“世の行末”が案じられたんですね、いはず語らずに……

——じッさい、あの時分は、このさき自分がどうなるのか、まるツきり見当がつきませんでした。……そのくせ、われ人ともに、わりに平気で、カストリを飲んで酔ッぱらつてゐたといふことは、度胸がよかつたのか、バカだつたのか？……

——両方ですよ。

——両方？……左様さよですか、なるほど……

——だから、鎌倉でも、たツた一人、靴みがきがでゝゐたゞけの若宮大路に、そのうち、だんく、闇市はできる、リntaxは

できる、パン／＼宿はできる。……さうなると、ぼくも、歌をわすれたカナリヤになつて、自然「青葉しげれる」と縁が切れた……のを、あるとき、あなた、ちツとも、このごろ、あれをうたひませんね」と、ある人からひやかされました。……で、さういはれて、ぼくは、はツと思つた。……さういはれるまで、うツかりしていたんです、ぼくは……

——どなたです、そのある人といふのは？……

——やッぱり漫画のＹさんです。……



四五日、また、東京の宿屋ですごして、ある晩、終電車よりずツと早い、九時十五分といふのに乗った。あたまが重く、何か、気もちがさツぱりしなかつたからである。

電車に乗るなり、ぼくは、腐つたやうに眠つた。

鎌倉に着くと、いつふりだしたのか、雨がビショ／＼ふつてゐた。そればかりでなく停電だつた。

——めづらしいナ、こんなあんたんとした光景は……

と自分にいひつゝ、ぼくは、駅まへの、〃リンドウ〃の扉^{ドア}を押した。……〃リンドウ〃といふのは、鎌倉ペンクラブの会員たちを定連にもつ喫茶店である。

どのテーブルにも、蠟燭の火が瞬いてゐた。

ぼくはそこから電話をかけた。……わが家へではない、わが家のそばのF医院へ……

電話口にでた声は、奥さんだつた。

——風邪^{かぜ}だらうと思ひます。……大^{たい}したことはないと思ひますが、一寸、これから、お寄りしますが……

と、ぼくはいつた。

——じつは、宅も、いま、少々熱がありまして、休んでをりますんでございますが……

と、奥さんはいつた。

——お風邪ですか？

——と思ひますんでございますが、……

——御診察ねがへなくつても、お薬だけでも頂戴に、いま、すぐ、うかゞひますから……

F 医院の院長の F 博士は、満洲帰りのもと軍医で、六七年まへ、材木座に開業したのだが、二三人、むづかしい病人を直したので、たちまち「名医」だといふことになった。そして、近所でも、おどろくほど繁昌した。ぼくとは、学校の関係で……F さんも、ずツと、慶応義塾だった……医者对患者の附つきあひ合以上の附合をもつた。……つまり、幾分、飲み仲間でもあつたわけである。

十分ほどのあと、ぼくは、F 医院の門のまへで自動車を下りた。大きな水たまりが門のまへにひろがつてゐた。こゝも停電で、蠟燭の火がたよりだった。

ぼくは玄関に立つたまゝ、奥さんからうけとつた検温器を腋の下にはさんだ。

八度すこしの熱があつた。

——宅は、九度越してをります。

と、奥さんはいつた。

雨の音が、蠟燭の火の瞬きにかよつた。



Fさんは、それから十日ほどして、この世を去つた。

何といふ、あツけなさ。……と思つたのは、ぼくが知らなかつ

たので、Fさんは、それまでに、幾たびも喀血してゐたのだつた。しかも、その胸のやまひは、患者から感染したものだつた。



ぼくは、このごろ、世の行末ならぬ身の行末についてのみ考へてゐる。……なぜだらう?……庭の、まっさかりの連翹の黄が、春の漸くふかいことをつたへてゐるのは……

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆91 時」作品社

1990（平成2）年5月25日第1刷発行

1999（平成11）年8月25日第6刷発行

底本の親本：「久保田万太郎全集 第一五巻」中央公論社

1968（昭和43）年6月

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2014年9月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

十年……

久保田万太郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>